JASIS2012 見聞録

9月5日（水）から9月7日（金）にかけて，千葉県の幕張メッセにてJASIS2012が行われた。我々は，その中日である9月6日（木）に取材を行った。取材の最初に，展示会場の脇にある事務局本部で日本分析器機工業会のJASIS実行委員会委員長の田中隆司氏，技術委員会委員長の小森亨一氏のお二方から，お話を伺った。

昨年までは，分析展/科学器機展の合同展として開催されてきたが，分析展は50回，科学器機展も東京開催では35回目の節目の年となり，世界の市場環境も変わってきていることから，グローバル化に向けて世界でこの分野の中心となることをコンセプトに，合同展を発展させ，名称をJASISと変更されたそうである。また，日本が誇る技術を世界に発信することがJASISの重要な狙いであり，そのために新しい国際的なイベントの立ち上げ，展示内容の工夫を行ったと伺った。

第一回JASISのテーマは「未来発見」。この未来発見を予感させる特別展示や「エネルギーの未来」という題での特別シンポジウムなど多数の企画を立ち上げたとのこと。特別シンポジウムは取材前日に開催ということで残念ながら取材はできなかったが，550人ほどの参加で盛況に終わったそうである。また，日本科学器機協会と合同で実施された「分析器機・科学器機遺産」の発表と展示があった。世界に誇る器機・技術を文化的遺産として後世に伝え，新しい未来へとつなぐ強い意図が込められていた。認定遺産のほかに，我が国の分析器機・科学器機の変遷年表も発表されており，非常に興味深いものがある。

JASISは，展示会，新技術説明会，コンファレンスの三つの大きな柱からなる。展示会は，過去最大の1,363小間，過去2番目の438社・機関の展示規模で，昨年より広い五つのホールでの開催であった。新技術説明会は過去最高の98社337テーマとなり，特に，海外来場者向けに，グローバル市場を視野に入れた最新の技術情報を日・英同時通訳で紹介する件数が昨年から大幅に増えたそうである。本年は，全来場者の約64％（15,000人程度）が新技術説明会を聴講され，大変好評だったようだ。コンファレンスに関しては，昨年までの米国と韓国に加えて中国，アジアとの合同セミナー，英国王立化学会主催の国際シンポジウムが新たに企画されていた。今後も，三つの柱の内容を充実させることで，アジア最大規模の分析・科学器機関連の総合展として，世界への情報発信をさらに推進させていきたいと仰っていた。

本部事務局で1時間ほどお話を伺った後，会場の取材に移った。展示会場は，4～8の五つのホールを使用していた（写真1）。写真のとおり，広大な会場ではあったが，取材中は多くの人で賑わいを見せていた。JASISのHPで確認すると，3日間を通しての来場者数は23,000人程度だったそうである。また，新技術説明会は例年通り隣接するホテル（アパホテル＆リゾートおよびホテルニューオータニ幕張），コンファレンスは国際会議場で開催されていた。このように大規模なイベントであり，残念ながら一日ですべてを回りきることはできなかった。ここでは，グローバル化へ向けた取り組みを中心に展示会場の紹介をしたい。

展示会会場でまず目についたのは，日・英・中・韓の4か国語で表記された会場案内である。本部での取材で，本展の来場者のおよそ2.5％が海外から（昨年までに比べて多くなった）であり，将来的には海外来場者5％以上を目指すと伺っていた。実際に会場での取材中，海外来場者とすれ違うことも多かった。

8番ホール入り口にあるイベントスクエアの隣では，本展のテーマに関する特別企画展示「未来発見コーナー」があった（写真2）。今年は，特に「安全・安心（食・環境）」，「マテリアルサイエンス」，「ライフサイエンス」の3分野に焦点がしぼられ，パネルやDVDにより，その技術がおかれている社会的なニーズ，特徴，将来展望などが紹介されていた。立ち見が多い展示会場の中で，展示をゆっくり鑑賞するためにベンチが設置されるなどの配慮が伺われた。この展示については，海外での分析・科学技術イベントにも展開する予定と伺った。

展示会場の奥には，オープンフォーラムコーナーが設置されていた。ここでは，若手研究者，企業の新入社員といった方々を対象にした科学器機の基礎講座「やさしい科学器機入門」のほか，公益財団法人日本科学技術振興財団（科学技術館）による実験ショーなどが開催され

写真1

写真2

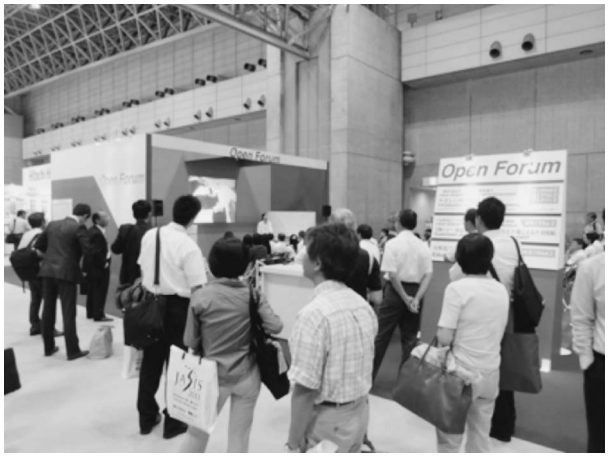

写真 3

写真 4

ていた。取材中は，実験ショー「身近な放射線計測」が行われており（写真 3），多数の立ち見がでるほど盛況であった。なお，JASIS コンファレンスにおいて，四つの関連セミナー（それぞれ放射化分析研究会，産総研計測標準総合センター，日本環境測定分析協会，環境放射能除去学会が主催）が開催されるなど，放射線計測に関する展示・講演件数は昨年以上に多く，関心の高さが伺われた。

オープンフォーラムの隣では，インターナショナルオーガナイゼーションコーナーが設置されていた（写真 4）。ここは，各国の在日大使館や通商代表部など海外機関による展示エリアとして，U.S. パビリオンや韓国コーナー，中国コーナー，カナダコーナー，JAIMA 友好団体コーナーなどがあり，海外の分析関連企業や展示会といった情報を発信する場とのこと。コーナーの性質からか，企業ブースに比べてにぎわいが若干少なかったが，グローバル化へ向けた取り組みの一環として，今後も発展させていくとのことである。

展示会場の方から伺った話ではあるが，分析展と科学器機展の合同展となって 4 年，従来の限られたユーザーから来客層の広がりを感じているそうである。合同展は，理化学機器から物質の構造解析装置まで，文字どおりの分析・科学機器/技術の入り口から出口までの最新情報を発信する場として始まっており，合同開催によるシナジー効果が着実に現れているのであろう。

学協会コーナーにあった日本分析化学会のブースで，事務局の方と歓談した後に，コンファレンス会場に移動した。

コンファレンスでは，昨年までの JAIMA コンファレンスに引き続き，JAIMA セミナー「これであなたも専門家　○○編」などの初心者向け講習会，学協会や団体が主催する先端分析器機・技術や調査報告に関する講演，および国際会議が 3 日間にわたり開催されていた。

写真 5

これまで東京コンファレンスで行われていた講演会については，昨年に JAIMA コンファレンス内のインターナショナルセッションとなっていたが，本年は英国王立化学会主催の国際会議「英国王立化学会（RSC）東京国際コンファレンス 2012」として，国内外の著名な研究者による講演，ポスター発表が開催されていた（写真 5）。ポスター発表件数は昨年より若干多い 119 件ということであった。

このほかにも，日本分析器機工業会が国内外の関連団体と連携・協力して，U.S. シンポジウム 2012，Sino−Forum2012「日中科学器機発展フォーラム」，アジアテクニカルフォーラム，日韓分析技術情報交流会といった国際コンファレンスが行われていた。今後も JASIS の柱の一つとして国際コンファレンスの拡充と発展を目指しているとのこと。ほとんどの講演は英語（日本語同時通訳付）で行われていたが，Sino−Forum2012 については日本語・中国語（日・中同時通訳付）で試みられていた。

事務局での取材時には，アメリカの Pittcon 展，ドイツの Anatytica 展と並ぶ，あるいはそれ以上の分析・科学技術イベントとしての第一回 JASIS 開催経緯，そしてその将来についてお話を伺った。その中で，展示会，新技術説明会，コンファレンスの 3 本柱の個々の内容を充実させるとともに，それぞれの連携を強めていくことで，真に国際的なイベントへと発展させていく，というお話が特に印象的であった。そこで，今回の訪問記では，第一回 JASIS のテーマである「未来発見。」，そしてグローバル化に関するイベントなどについて紹介させていただいた。

最後に，取材にあたって貴重な時間を割いていただいた日本分析器機工業会および日本科学器機団体連合会の諸氏ならびに事務局の皆様に，この場を借りて御礼申し上げます。

〔茨城大学理学部　山口　央
㈱日産アーク　櫻井裕樹〕